

品詞分解と口語訳

(1) いづれの御時にか、女御、更衣あまたぞらひ給ひける中に、いとやんごとなき際に格助 断用 係助は

カ四体 格助 どの帝の御時代であったか、カ四体 断用 係助 女御や、更衣が何人もお仕え申し上げなごう中に、カ四体 断用 係助 たいして重々しい家柄ではなかつた

あらぬがすぐれてときめき給ひありけり。カ四体 格助 断用 係助

カ四体 断用 係助 三変未打体格助 断用 係助

目立って帝のご愛情を受けなごうかあつた。

(2) ゆく河の流れは絶えずして、しかもその水にあらず。よどみに浮かぶつたカ四体 格助 断用 係助

カ四体 格助 断用 係助 流れていく川の流れは絶えることがなく、カ四体 格助 断用 係助 それでいてどの水ではない。よどみに浮かぶつた

かたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。カ四体 格助 断用 係助

カ四体 格助 断用 係助 一方では消え、一方では生まれて、カ四体 格助 断用 係助 長く同じ状態である例はない。

(3) 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のこころりをカ四体 格助 断用 係助

カ四体 格助 断用 係助 祇園精舎の鐘の音には、カ四体 格助 断用 係助 すべてのものは無常であるという響きがある。娑羅双樹の花の色は、盛んな者も必ず衰えという道理を

あらはす。

カ四体 格助

(4) つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとナリ体 格助

ナリ体 格助 することがなく手持ちぶさたなにに任せ、日暮れるまで、硯に向かつて、心に浮かんで消えていくまらなことを、とりとめもなく

なく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。カ二已 格助 断用 係助

カ二已 格助 断用 係助 書きつけていると、不思議にも心が乱れるような気分になる

(5) 目目は百代の過にして、行きかゝる年もまた旅人なり。係助 断用 係助

係助 断用 係助 月日は永遠の旅人であつて、係助 断用 係助 来ては去り去つては来る年もまた旅人である。

【たいせつなことは】

さぶらふ〓お仕えする。ごさいます。です。ます。

給ふ〓お…になる。…なさる。

やん(む)ごとなし〓捨てはおけない。高貴だ。一通りでない。

うたかた〓あわ。

無常〓世の中にあるすべてのものは生滅転変しつづけて、常ではないということ。

つれづれなり〓することがなく退屈なさま。

日暮らし〓日が暮れるまで。一日じゅう。

よしなしこと〓つまらないこと。とりとめもないこと。

そこはかとなし〓とりとめもない。はつきりとした理由がない。

あやし〓不思議だ。粗末だ。身分が低い。

ものぐるほし〓心が乱れるような気分がする。気が衰になりそうだ。

過客〓旅人。

解説

「絶え」は下に助動詞「ず」があるので未然形。

「久しく」は下に用言「とどまる」があるので連用形。

「あり」は文を言い切っているので終止形。

例文(5)の「過客にして」の「し」はサ行変格活用動詞ではない。

(名詞「過客・断定の助動詞「なり」の連用形「に」・接続助詞「して」)

一 やんごとなき 形容詞 ク活用 やんごとなし 連体形

絶え 動詞 や行下二段活用 絶ゆ 未然形

消え 動詞 や行下二段活用 消ゆ 連用形

久しく 形容詞 シク活用 久し 連用形

なし 形容詞 ク活用 なし 終止形

二 あり ㊦行変格活用 あり 終止形

三 形容詞・形容動詞

つれづれなる 形容動詞 ナリ活用 つれづれなり 連体形

そこはかとなく 形容詞 ク活用 そこはかとなし 連用形

あやしう 形容詞 シク活用 あやし 連用形

ものぐるほしけれ 形容詞 シク活用 ものぐるほし 已然形

音便〓あやしう 音便 あやしく